

# 谷川連峰 仙ノ倉谷 西ゼン

2014/09/27 (土) 曇りのち快晴

メンバー：齋藤 CL, 落合 SL, 松村, 荻原 (ミソジ)

ゲート 5:45 ダイコンオロシ沢出合（入渓） 6:50 東ゼン出合 7:30 第2スラブ出口 9:45  
池塘 11:10 平標山 11:35 着 12:10 発（平標新道経由） ゲート 14:55

今年は季節の移ろいが早い、沢登りシーズンもいよいよ終盤に差し掛かってきた。

西ゼンは谷川連峰の新潟県側、魚野川支流の仙ノ倉谷が平標山に突き上げる長大なスラブを掛ける沢だ。

周辺の万太郎谷、湯檜曽川、赤谷川とは趣が異なり、仙ノ倉谷はスラブが他に大きく発達しているのが特徴的で興味深い。

谷川では滝の事をセンと呼ぶ、仙ノ倉とは滝と嵒（岩）が多いのでこんな呼び名になったのだろうと勝手に想像しているが、何ともいい響きに心惹かれる。

仙ノ倉谷は東、中、西と三分されていて西ゼンがいちばん明るく長大なスラブを掛けているので、面食いの我々も手始めに西ゼンを選択した。

前夜は土樽駅でSB、土合駅ではお馴染みだがこの時期土樽駅を利用する者は沢屋くらいしかいないだろう。

先客は誰もいなかったが、駅舎でチケットを貰ったら万太郎本谷を遡行するというパーティーがやってきた。

話を聞いてみたら齋藤さんの知り合いの知り合いだった、世間は狭い。。

駅舎は電気が消えないのでホームの階段下で寝てみる、夜中は貨物列車が何度も通過したが比較的安眠だった。

翌朝毛渡沢のゲートがある登山口まで移動、林道は特にダートな所は無く普通車でも通過には問題無い。

早朝は稜線に厚い雲が掛かっていたが徐々に抜けていき、秋晴れに紅葉が映える約束されたような一日の始まりだ。

東ゼン出合で磨き上げられた長大なスラブに一同感嘆する、手始めに右岸の壁でフリクションを確認してみるが案の定よく滑るので手堅く最初は右から巻き気味に登る。

沢のスラブはクライミングでいうスマーリングより体重移動がポイントだ。

習うより慣れろとはよく言うが、最初は少し腰が引けてしまうが騙し騙し登っているうちにコツが掴めてくる。

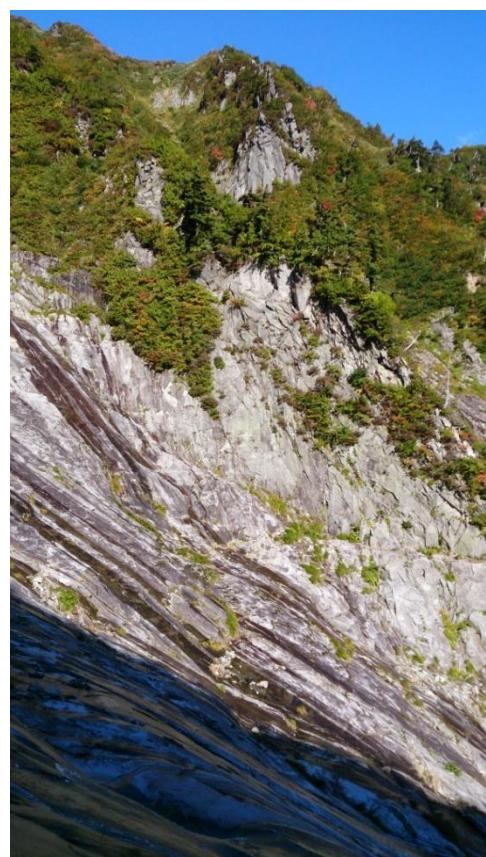
スラブを下降するのは困難なので夏の終わりで蝉にならないよう一歩一歩慎重に登る、油断すると滑り台では済まないくらいの滑落となってしまうのでルート・ファインディングは非常に重要だ。

西ゼンは下部と上部で第1・第2スラブと分かれており、草付、カンテ、クラック、コーナー、バンドを上手く拾いながら順調に高度を上げていく。



スラブ上は沢幅が広いので水量や季節によってルート取りも若干変わるものがあると思うが、何でもアリの沢登攀は現場判断でルート・ファインディングしながら登る方が感性が磨かれて相変わらず楽しく登れる。

沢はレッドポイントよりオンサイトがより刺激的だ！？



草付はアイスハンマーがあれば安心感が絶大。



右岸の草付から第 2 スラブを仰ぐ

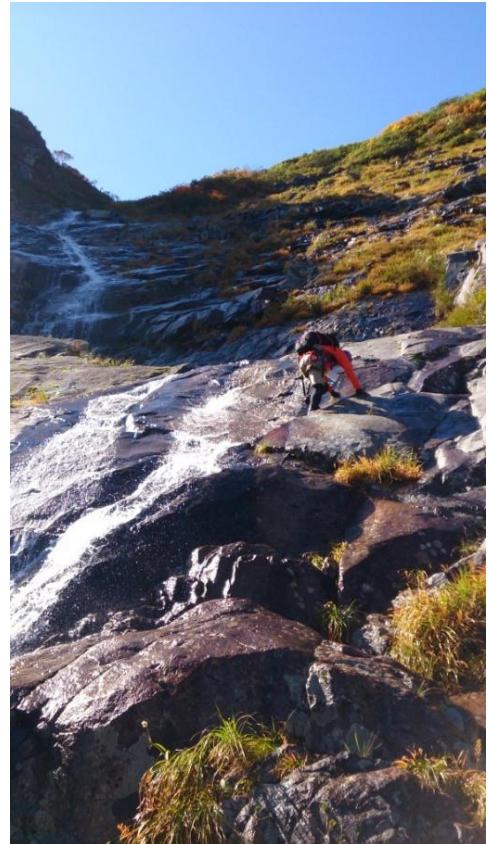
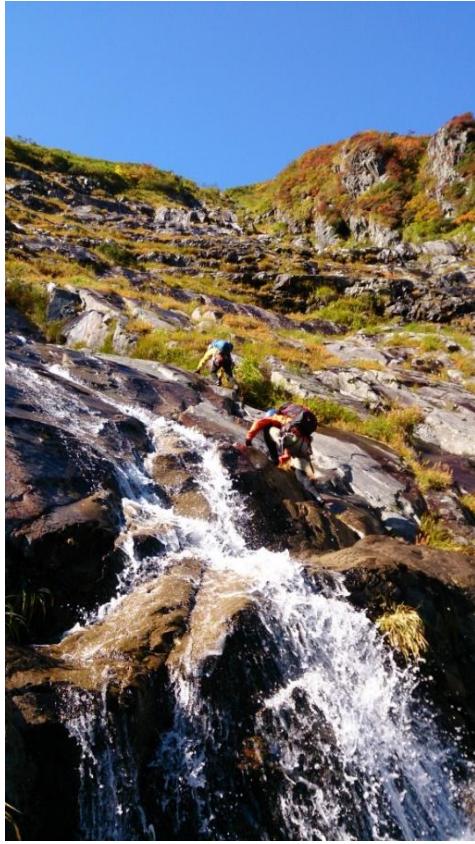
下から仰ぐより登ってみるほうが傾斜が強い印象を受けたので油断は出来ない。



スラブ帯はノーザイルで越えた

スラブは登攀中に雨に降られると一面が水流と化すので逃げ場を失う可能性が高い、スラブなので増水も早いが引きも早いと思われる。

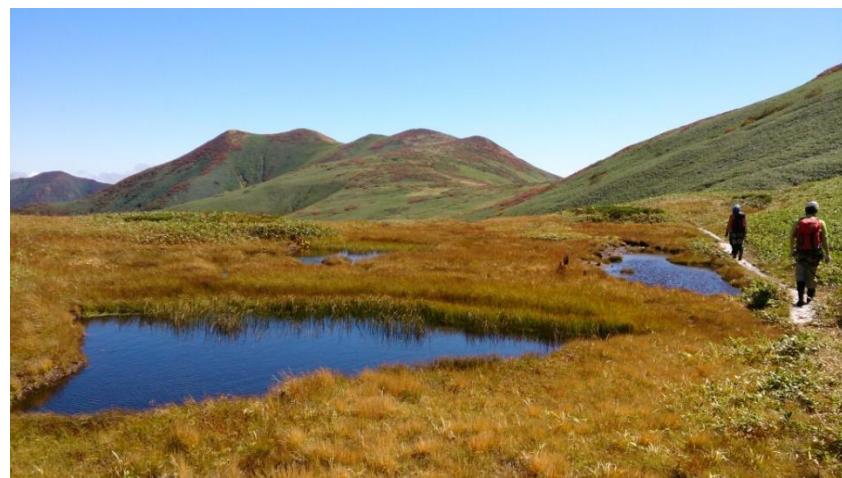
いずれにせよ、天候リスクには十分注意して登る必要があると感じた。



可能なところは水流突破を楽しむ。

ツメは背丈上の笊藪を小一時間程度ヤブ漕ぎして平標新道の池塘に出た。

出来れば平標山の山頂東に出たかったのだが、気づいてからでは修正が難しく今回の反省点の一部である。



仙ノ倉山～平標山、眼下には深い谷が刻まれているとは思えない程癒し系の景色に変わる。

下りで平標新道からツメの様子をよく観察してみたが、最初の二俣（1：1）を左に入ると滝が見えるが、そこから左上し仙ノ倉山と平標山の鞍部に出るルートが源頭部まで楽しめるようにみえた。

当然ながらツメは地形図には表れない枝沢がいくつか走っているので、沢地形を上手く拾っていけばヤブ漕ぎは最小限で済むと思われる。（あとはそれぞれのセンスあるのみだ）



最高の秋晴れに恵まれた平標山山頂にて

下りは平標新道でゲートに戻るが、尾根の中部から遡行してきた西ゼンのスラブが一望出来るので感慨深い。

平標新道は人があまり入っていない割にはよく踏まれていて歩きやすい道だった、ただ縦走で土樽駅までは歩くマニアはあまりいないようで山頂以外では誰ともすれ違うことなく静かな山旅だった。

山に登ると次はどこに行こうという話になるが、西ゼンの奥に大きな滝を掛けている東ゼンも遡行価値が高そうだ。

来年の沢計画に話が弾み湯沢を後にしたが、下山後に木曽御嶽山が突然噴火したことを知り、戦後最大の火山災害となってしまったこの日は皮肉にも秋晴れに紅葉が美しい穏やかな一日だった。

亡くなられた方々の安らかなご永眠をお祈り致します。

(記録 落合)